宅について、外交の緊迫に対応するためのものとの注目すべき解釈を提示する。第二章では朝廷内部での官人勢力の変化、皇極と蘇我氏との対立が百済大寺の再建・飛鳥板蓋宮造営をめぐって皇極二年頃から露呈したと説く。第三章では豊浦大臣による紫冠の私授によって父と並んで政局の中枢に出てきた鞍作が上宮王家を滅ぼした事件の原因・経過・影響にふれ、第四章ではいわゆる乙巳の変（蘇我本宗家滅亡事件）の直接的原因として、鞍作の難波遷宮計画があったとする。

以上きわめて大雑把な紹介をしたが、このような分析によって示された毛人・鞍作像はきわめて対照的である。毛人は父馬子の死後実力で大臣の地位をかちとり、鞍作は毛人から大臣の地位の象徴たる紫冠を授けられ政局の中枢に登場した。また彼らの政治的立場としては、毛人はいまだ氏族的思考の枠内に留まっていたのに対し、鞍作は唐の新知識にふれ、それに学んだ〝新式の政治〟をめざし、対唐接近を図るため難波遷宮計画をすらもったかなり開明的な政治家と評価されるのである。

著者がこのような人物像を導きだした方法は徹底した『日本書紀』の史料批判とその他の異伝・外国史料の検討による歴史の再構成であり、それによって『日本書紀』の「逆臣」蝦夷・入鹿という像とはかなり異なった二人の人物像を描きだすことに成功したといえよう。

但し、いくつか疑問がないわけではない。二人の名についていえば、先ず毛人では東夷としての蝦夷と、『藤原家伝』の「必有〝夷〟宗之禍」という意識の二つが「毛人→蝦夷」という易名への要因としてあげられるが、両者がどのような関係にあるか不明確な点が残る。また蝦夷という字に強い蔑視感が含まれていることは確かであろうが、造東大寺司長官として有名な佐伯今毛人を今蝦蟖と表現する例もある。こうした例をも含めた分析が望まれた。鞍作についても、『古事記』の易名伝承の影響で入鹿とされたとの推論の根拠は十分なものとはいえないと考える。易名伝承は『日本書紀』にも見えるが（応神即位前紀）、そこには入鹿の話がでてこないことも、易名伝承と入鹿の結びつきにいささか疑問を抱かせる点である。

また鞍作の開明性の重要な指標たる難波遷宮計画については、皇極紀に特徴的な予兆記事及び『聖徳太子伝暦』所引の「暦録」からの立論であり、それだけにそれらの史料のより深い検討が望まれるところである。

ともあれ、もはや『日本書紀』が描く蘇我氏像にとらわれることはできなくなった。今後一層の『日本書紀』の史料批判とそこから導かれる蘇我氏像再構成の深化は著者のみならず後学の者の責務であろう。尚、本書をより一層理解するためには、本書とほぼ時を同じくして刊行された同じ著者による『新版飛鳥』（NHKブックス）をあわせ読まれることをお勧めする。

（新書判・一六七頁、一九七七年一二月刊　人物叢書一七七　吉川弘文館　六〇〇円）
（館野和己　京都大学大学院生）

松山　宏著
『武者の府　鎌倉』

本書は日本文化の会編『記録・都市生活史』の第二巻として刊行されたものである。著者松山宏氏の中世都市に関する研究は、先年上梓された氏の論文集『日本中世都市

の研究』（大学堂書店、一九六三年）にまとめられているが、同書の「あとがき」で自らが語っておられるように、氏の研究の焦点は政治都市の権力的性格を明らかにするところにあった。その場合松山氏にとって不満だったのは、従来の中世都市研究が、都市の基本的条件として商業を重視するあまり、政治都市にも明瞭に商業機能が看て取れる戦国期以降に圧倒的関心を寄せ、かえって古代都市との連続面を見逃したり、過度の中央（畿内先進地域）重視の弊を招いたことであった（同書「序章　中世都市研究の問題点」）。国府――府中、守護所――守護城下についての著者の考察は、かかる反省から始められたのだが、鎌倉もまた、同様の意味において数年来関心の的だったという。『武者の府　鎌倉』は、前著での研究成果を踏まえ、「商業を基本条件としない鎌倉」（あとがき）として叙述されることとなったのである。

今まで、都市鎌倉が研究者の興味を全くそそらなかったわけでは決してない。戦前、大森金五郎氏の『かまくら』をはじめ、いくつかの論著が公表されたし、戦後の『鎌倉市史』は、一段とその研究水準を高めた好著として定評がある。しかし、京都・奈良と並んで中世の三大都市と称される割には、都市鎌倉に関する研究は、他の二つに較べて、質量ともに大分差があると言わねばならない。その原因としては、鎌倉の商業・流通機能が京・奈良に劣ったため、研究者の関心の多くが後者に向けられたということのほかに、鎌倉の都市的考察に資しうる文献史料の乏しさが挙げられる。まとまった記録として唯一吾妻鏡を掲げうるのみであり、社寺や朝廷・貴族の記録・文書は著しく乏少にして、かつ断片的なのである。

かような研究情況と史料的制約の克服をめざして執筆された本書の叙述は、まことに意欲に溢れて斬新であり、著者が、全篇を通じて政治・軍事・文化・生活等の諸側面から検討した結果、導き出された都市鎌倉の二つの特徴――①終始武士の都として独自の性格を保ったこと②全国の守護所の源流をなしたこと――は、真に妥当なものとして承認されるだろう。今後、本書が鎌倉を研究する際の必読文献たる地位を占めるのは、間違いない事実と断言できる。実は私もつい最近、鎌倉についての小論を記したが（「鎌倉と関東」〈有斐閣新書『日本史(2)』〉）、本書から非常に多くの事柄を教えられた。読者諸氏も実際に本書を手に取って繙読されるよう、是非お薦めしたい。

ただ、通読してみて、充分に理解できない箇所が皆無だったわけではない。松山氏の都市論の骨格は「序章　鎌倉都市論」で丁寧に説かれている。そこで氏は、各時代に共通した都市の特色として、(a)「一定地域の政治・経済・交通・宗教・文化などの活動を促し、かつそれらを統制する核心が存在し、それに依存して人口が集中し」、(b)いずれの都市においても「政治＝権力が優先している」点を挙げ、また、政治都市を(c)「武士領主の拠点である城館を中心とし、その他の経済・交通・宗教・文化など一定領域を支配するために重要な機能をもつ機関を集めた所」だと定義し、(d)「これらの機関はすべてなければならぬ訳でない。もっとも重要かつ基本的なものとして、政治・軍事の機関、つまり城館と、それ以外のもののうち少なくとも一つの機関が置かれることをもって、中世政治都市と考えたい」とされる。そして鎌倉は、京都と並んで中世政治都市の一方の源流をなすものと位置

付けられるのである。(b)の当否は判断できないが、(c)が何故武士領主でなくてはならぬのか分からないし、(d)の論拠も吟味の余地がありそうである。しかし、それもいくつかの限定条件を付ければ、全体として諒解できる内容であり、概念規定が明快なのが何より心地よい。懇切な配慮といえよう。だが、鎌倉を含めた中世都市そのものの概念、特に古代都市とはどの点で異なるのか（著者は古代都市から中世都市への連続面を強調されるが、それとは別に、中世都市独自の機能・性格を追求する要があることはいうまでもない）という点については、ついに読み取りえなかった。前著を参照しても、中世都市の定義について再検討の必要を力説され、今後の研究課題を提示してはいるものの、氏が中世都市をどう捉えているのか、明言しておられないように見える。あるいは、それが現在の中世都市研究の一般的情況であり、松山氏一人に帰すべき責任ではないかも知れないし、また、私の能力の乏しさが理解を妨げているのかも知れない。おそらくは後者が主たる要因であろうが、著者が日本中世都市の研究に多大の業績を上げて来られた方だけに、私の如き浅学の者にも分かりやすいかたちで示して戴きたかった。

守護所や守護城下の形成を人為的でなく「自然発生的」とし、鎌倉の場合もそれを否定しないらしい点も、少々気になった。前引(b)の指摘と矛盾しないのだろうか。(b)の意味するところは、都市づくりには常に政治＝権力が主導的力を発揮したということだが、それならばむしろ逆に、自然発生的でなく人為的だと評すべきではなかろうか。

従来の中世都市論は商業を重視し過ぎたきらいがある、との意見には全く賛成だし、「商業を基本条件としない」立場から都市鎌倉を描く作業は貴重であり、また重要な試みだと思う。と同時に、京都や奈良とは異なる鎌倉独特の商業・流通のあり方を追求することも、同程度に意義のある課題として設定されねばならないだろう。すでに脇田晴子氏も触れているように、商品経済を自己の統制下に含み込んだ在地領主の結集地として、商業上特殊な性格を鎌倉は有していたからである（「日本中世都市の構造」〈『日本史研究』一三九・一四〇合併号〉）。

私は、望蜀の言にいささか紙幅を割き過ぎたようである。そのために、本書の内容豊富にして優れた価値が、少しでも損われるかの如き印象を読者に与えたとしたら、全く心外である。とりとめのない言辞を連ねる破目に陥ったのは、生来の手際の悪さと、この機会に、自分自身に課すべき課題を認識しておきたいとの願望からにほかならない。本書の論点が多岐にわたり、豊かな内容を有することは、私の稚拙な表現を介するよりも、最後に本書の章節名をそのまま転載することにより、たちどころに諒解されるものと信じる。前に、内容の紹介をあえて簡略に留めたのは、実はそうした考えからであった。松山氏よりの学恩に感謝しつつ、拙い紹介の筆を擱くこととしたい。

序章　鎌倉都市論
第一章　鎌倉の草創（要害と海と父祖の地、源頼朝の入府、武家都城の創設）
第二章　都市鎌倉の発展（源氏から北条氏へ、政治都市の確立、都市化の進展、抑圧と反抗）
第三章　文化風土（京風文化、禅と鎌倉文化、仏教各派の活動、土着文化）
第四章　鎌倉周辺と守護所（相模と房総、

武蔵、国衙と守護所、守護所の事例）
第五章　幕府から鎌倉府へ（得宗専制と鎌倉の政治、街の景観、幕府の滅亡、鎌倉府成立）
あとがき

（四六判　三一六頁　一九七六年一一月
柳原書店　一七〇〇円）
（杉橋隆夫　立命館大学助教授）

米原章三伝刊行会編
『米原章三伝』

米原章三（一八八三―一九六七）は戦前・戦後の鳥取県政財界の牛耳をとり、その指導者として県下に君臨しつづけた実力者であった。本書はその死を追悼し、その業績を記念するために編まれた伝記である。しかし通例みられるような顕彰本の類とは少々趣きを異にしており、米原という地方政財界の要に位置する人物をとおして描かれた一編の鳥取県近現代史、とよぶにたる内容を本書は具えている。ことに壮年期を記述した各章（第三―第七章）は、二〇―三〇年代の政治史に関心を有する者の興味を多いにひくことと思われる。章三が養子に入った米原家は県下でも有数の大山林地主であり、県会議員をも出す典型的な地方名望家の家であった。若くしてこの米原家の家長となった章三が、いかにして「県下政治経済界の統合者」と呼ばれるまでに成長していったのか。これがいわば本書の核心をなす問題にあたるわけであるが、私信などを交えた叙述はかなり明快にその過程を描きだしており、説得力に富むものといえる。とくに興味をそそられた点を紹介しておきたい。

鳥取の憲政会は第15回総選挙（一九二四年）で定数4を独占する大勝利を収めた（米原は支部幹事として采配をふるった）が、本書はその原因を、元来は地主層を中心としてきた同会が新たに抬頭してきた都市中小商工業者層の支持をうまく把握しえたことに求めている。米原は、彼自身は地主ではあったが、政友会と対抗するためには「非政友中間層の力を利用し、これを憲政会の傘下におさめること」が是非とも必要であると考え、この戦略を卒先して実践に移し、それによって党のリーダーとしての位置を確固としたものにしていったのであった。同派が中間層の支持を吸収する軸となったのはいうまでもなく普選のスローガンであった。かかる憲政会の変化はたんに鳥取だけのものではなく、広く全国的な現象だと考えられるだけに、本書の示すケースはかなりの一般性をもつといってよいだろう。そのほかこれに関連して鋭い指摘だと思ったのは、米原のなかにある地主的利害と憲政会領袖としての一般的利害との矛盾が、国政レベルでは普選を要求しながらも町村レベルでは二級選挙制の存置を望むといった矛盾した言動となってあらわれたという点や、民政党支部の構造が大地主層と都市部中小商工業者・インテリ層との同盟という性格をもっており、その両者は米原という存在によって媒介されていたという点などである。

さらに興味深いのは次のような部分であろう。それは、二〇年代からの経済恐慌が県下の有力地主（彼らは日露戦争前後から企業活動に力を入れ、地方財界を形成していた）の経済的基盤を動揺させ、その事業の統合整理・資本の集中を余儀なくさせた。その結果、それまで政友・民政にわかれて対立しあっていた彼等が次第に党派的対立を解消し、協同して経済的利益を追求する